

[論文]

目的と態様の「ように」について

宝 島 格・今 仁 生 美

名古屋学院大学商学部 / 外国語学部

要 旨

日本語の助辞「ように」の用法のうち、目的を表す用法と態様を表す用法は同一の文に対して異なる意味をもたらすとされる。本稿ではこの違いを、その文脈によってもたらされる「目的」の程度の違いとして扱うことを提案する。これにより、計算機にこの語を含む文を「理解」させる際に、2つの用法を明確に区別して扱うのではなく、文脈に応じて決まる周辺事象や発話者の意図との関係に基づいて「理解」させるべきであることが示される。

キーワード：ように、態様、目的

A unified approach to the usages of “yoo ni” in Japanese

Itaru TAKARAJIMA, Ikumi IMANI

Nagoya Gakuin University, Faculty of Commerce / Faculty of Foreign Studies

はじめに

「ように」を含む次の文（[名古屋学院大学日本語表現部会2019]）

(1) 肉が焦げないように弱火で炒めてください。

は2つの明確に異なる意味で捉えることができると言われる。つまり

(1a) 「目的」肉が焦げないことが目的で、弱火で炒めればそれが達成される。

(1b) 「態様」弱火で炒めたからといって肉が焦げないわけではないので、焦げてしまう炒め方ではなく焦げない炒め方をすることに注意する。

である。話し手がどちらの用法を想定していたと捉えるかは、聞き手の行動に影響を与えることになる。「態様」用法は動作(炒める)の詳しい様子を説明していることから「態様」と呼ばれる。「目的」用法は正に目的を述べるものである。態様と捉えた聞き手は動作の際に動作の詳細をどのようにすべきかに注意を払うことになるが、目的と捉えた聞き手はその動作をしさえすればよいので、動作の詳細には頓着しないであろう。従って、話し手の指示に正しく従うためには両用法を正しく区別する必要がある。そのため日本語の教授テキストなどではこうした例文によって、意思伝達に関して注意を喚起している。

しかし、この区別は人によって、また状況によって必ずしも明瞭ではない。特に、ある発話において一方の用法が可能かどうかは、人によって異なる場合がある。(1) のような発話の意味の捉え方は、その文脈、用いられている語句やその配置、聞き手の知識経験などによって大きな影響を受ける。実際筆者の一方は、(1) において態様の用法には違和感を抱いている。

従って、「ように」の2つの用法は、「用法」として明確に区別されているものというよりは、発話を取り巻く文脈（聞き手の知識なども含んだ広い意味で）に影響されて意味が定まるものであるように思われる。そもそも、「態様」であっても微視的には「目的」的な意味合いを持つのであり、その動作（炒める）を行う最中においては「焦げない」という目的を達成すべく注意を払って動作を行うことになる。他方で、「目的」用法であっても巨視的には、その目的を達成するような動作を行うという「態様」の意味合いを持つのである。即ち両用法はもちろん相通ずるものを持っているのであり、いずれの場合も「ように」の基本的性質に帰せられるべきものである。

本稿ではこのように、「ように」の基本的性質から導かれるものとして両用法を扱うことを提案する。そのために有用であると考えられるのは、言語使用の全体像を視野に入れるような枠組みである。これまでの筆者の立場でもあるが、人間が自然言語を「理解」するのと同様の動作を計算機に行わせるためにはどうすればよいかを考える、という枠組みを用いることで、「ように」を用いる状況の全体を視野に入れて把握することが有用であるものと思われる。

1. 「ように」の2つの用法

日本語の「よう」の意味は、一般には次のように説明されるようである（[吉川2003]）。即ち、基本となるのは、「模様・様子・状態」であり、これが「比況・例示」の意味へと発展していき、更に内容を指示する「一致・帰着」といった関係を表すにいたる。また、文脈により「推定・不確実な断定」「目標・目的」「願い・希望・軽い命令」などの機能を持つ意味になる。

「ように」は複合的な助辞であり、その用法にもいろいろなものがあると思われる。しかし本稿では、副詞節を導くもののうち、前節で述べた2つの用法「態様」「目的」に絞って問題にしたい。

(1) については2人の筆者においても用法の捉え方が異なるように、用法の可否はかなり微妙である。筆者の一方にとっては(1)、そして(1c)であれば更に、目的用法のみが可能であるが、(1d)であれば今度は態様用法のみと感ぜられる。もう一方の筆者にとっては(1d)以外は両用法が可能である。(1d)は態様のみである。

(1) 肉が焦げないように弱火で炒めてください。

(1c) 肉が焦げないように、弱火で炒めてください。

(1d) 弱火で、肉が焦げないように炒めてください。

このように判断が分かれるのは、語順や読点によって語句のまとまり具合が変わること、また話題にされている事物に関する常識から、ある用法が意味をなさないこと、などが影響しているようである。

ここではまずは、両筆者においても一致する、次のような発話を考えてみたい。

(2) 馬が逃げないように手綱を（木に）括り付けてください。

(2a) 「目的」馬が逃げないことが目的で、手綱を括り付けておけばそれは達成される。

(2b) 「態様」括り付け方がおかしいと馬が逃げてしまうので、括り付け方に注意する。

これら2つの用法の違いは、どのようにして出てくるのであろうか。

1.1 スコープによる説明

(2) における用法の違いを、下記の(2c)と(2d)が示すようなスコープの違いとして捉える方法がありうる。

(2c) [馬が逃げないように] [手綱を括り付ける]

(2d) [馬が逃げないように] [手綱を括り付ける]

但しこれは扱い方の違いがややわかりづらい。スコープの違いが明瞭になるのは、否定の「ない」

を伴った

(3) 服が縮まないように洗濯しなかった。

(3a) 「目的」[服が縮まないように] [[洗濯し] ない]

(3b) 「態様」[服が縮まないように [洗濯し]] [ない]

のような例であろう。なお (3b) は、助詞「は」を入れて

(3c) 服が縮まないようには洗濯しなかった。

とするのが、表現上のテクニックとして態様を明瞭にする方法であることはよく知られている。

スコープの違いは、「ように」で導かれる節の内容が、動作「洗濯」と密接に結合しているか、結合度合いが緩いか、の違いである。そう考えると、(2c) と (2d) の違いは、

(2c) [馬が逃げないように] [手綱を括り付ける] :

「手綱を括り付ける」動作自体は1つのまとまりを成して完結しており、それに「馬が逃げない」が独立して付加されている

(2d) [馬が逃げないように [手綱を括り付ける]] :

「手綱を括り付ける」動作の内部に「馬が逃げない」が含まれており、「手綱を括り付ける」動作の内容に影響を与えるものとされる

のように説明できるであろう。

1.2 スコープによる説明の限界

しかし実際のところ、こうした「スコープの違い」は構造的にはっきりと区別されうるものであろうか。次の文

(4) 馬が逃げないように手綱を注意して括り付けてください。

において、「目的」と「態様」はどのように扱われるか。「ように」に2つの用法があって、これがスコープの違いとして明瞭に区別されているのであれば、「目的」用法

(4a) [馬が逃げないように] [手綱を注意して括り付ける]

は、「手綱を注意して括り付ける」が1つのまとまりとして独立しており、「馬が逃げないように」

目的と態様の「ように」について

とは無関係に意味が定まるということになるのではないか。これは直観的には納得しがたい説明である。単純に、このケースの場合「目的」用法が使えない、という説明も可能であろうが、それはアドホックな姿勢、むしろなぜ使えないかを説明すべきである、と感じられる。なお態様用法の

(4b) [馬が逃げないように [手綱を注意して括り付ける]]

は、括り付ける動作の内部に、馬が逃げないこと(に対する注意)の有無が含まれており、「ように」節の内容が括り付ける動作に影響を与える解釈である。

更に、

(5) 馬が逃げないように、手綱をきつく括り付けてください。

では、人によって、またそのときどきによって、両用法の感じ方が変わるようである(例えば筆者の一方にとっては、目的用法、即ち「きつく括り付ける」ときの「きつさ」に、馬の逃走可能性が影響しないような解釈は、難しく感じられる)。同様に

(6) この子が間違った道に走らないように(きつく)説教してください。

でも、「目的」と「態様」自体が渾然として、区別をつけづらくなっているように感じられる。「きつく」があれば若干「目的」的にも感じられるかもしれないが、それは(1)において「弱火で」を付加した工夫と同様、動作がより特定されることによって独立した感じ、内容のバリエーションの少ない感じが醸し出されるからである。それによって、より「目的」用法が明確に意識されるように、もともと例文(1)は工夫して作ってあったのである。

同じような例はいくつも考えうる。

(7) 次の試合では彼に勝てるように、一所懸命練習しよう。

はどうであろうか。行動(練習)の態様は、「一所懸命」によって完結しているようにも見える(目的用法)し、「彼との試合対策」を念頭に置いている(行動の態様に「ように」節が介入する)ようにも見える(態様用法)。

(1)(2)では確かに「目的」用法と「態様」用法では聞き手のその後の姿勢・行為が異なるし、(6)でも(特に「きつく」の入る場合には)ややその行為(説教の仕方の様々なバリエーションの中で、どの範囲が該当するか)に違いが出てくるであろうが、これはスコープでの説明のように明確に区別された用法の違いというよりは、より個別具体的な状況に応じて聞き手が反応の仕

方を考慮する際に生ずる違いではないか。

2. 計算機による発話「理解」と「ように」の解釈

人間が発話を理解する（そしてそれに基づいて行動する）ことを客観的に捉えるためには、計算機に発話を理解させるという枠組みで考えることが有用であると思われる（宝島・今仁 2002, 2003, 2016）。人間の脳内で行われている処理はどのようなものなのかを、同様の処理を計算機によって再現しようとする事で、捉えようという立場である。そのためには計算機には様々な装置（仕組み）を用意しておくことになるが、例えば推論の仕方や、世界や語に対する知識、あるいは行動するための仕組みなどを体系的に準備した上で、各発話に対する反応が、我々自身の直観とも符合する様式で行われることを目指すものである。なおこれは発話などの意味を、単にそれに対する聞き手の行動（外部への表れ）ということ捉えようとする立場とは異なる。聞き手（計算機）の「知識」への影響も発話の「意味」に含めることで、実際の人間にとっての意味を的確に捉えることができるものと考えられる。

さてこのような立場から言えば、(1)や(2)を「理解」させるための1つのやり方は、語(語句)「ように」に関する知識として、事前に決められた2つの用法(目的および態様)を用意しておき(計算機に与えておき)、これによって2つの解釈(対応)をするという方式である。しかしこれは前節に見た(4)~(7)などのような、明確に区別されづらい例にはうまく適用できない。それではどのような方法でこれらの発話を「理解」すべきなのか。

2.1 知識による反応の違い

聞き手が、話し手の要請に従って行動しようとしているものとすれば、(2)によって聞き手は「手綱を括り付ける」という行動をとることになる。そこに「馬が逃げないように」という付加的説明(あるいは要請)があることは、聞き手の心象風景(脳内での処理)に追加情報をもたらす。

「ように」に関する知識としては、「ように」の導く節内の状況が描出されるべきこと、そしてそれが「望ましい」「欲せられている」ものであること(それが実現される方向で行動が行われるのが良いこと、あるいは行われるであろうこと)が与えられるべきではないかと考えられる。しからばここで聞き手が追加情報を得た際に、聞き手は「ように」節の内容を実現しようとして行動することになる。従って、馬が逃げないことを実現しようとして聞き手は行動を(必要なら)変化させることになる。

そのため、手綱を括り付ける行動が、「馬が逃げない」結果をもたらす範囲に制約(限定)されることになる。これが態様の「ように」である。

しかし「ように」を扱う際に、もし聞き手の既に持っている知識に、「手綱を括り付ければそもそも馬は逃げないものである」という情報が入っていたとすれば、聞き手の行動自体は「ように」節によって影響を受けない。この場合「ように」節は目に見える行動には影響を与えないが、節の内容が望ましいもの(と話し手が捉えている)という事実は情報として聞き手の知識に蓄え

られることになる。これが目的の「ように」である。そもそも「目的」用法とされるものは、聞き手には「ああ、それが目的なんだ」とわからせる以上の意味合いはない。ここに述べたような処理がされれば、直観的には、「目的」用法において我々自身の内部で行っている処理がなされたと思えるのである。但し、こうした情報（馬が逃げないことが望ましい）は、引き続き馬に関して行動する中で、長期的には聞き手の行動に影響を与えるであろう。それこそが目的をわざわざ述べることの意義である。（短期的にも、目的を述べることによって聞き手がそう行動する可能性が高まるという影響もある。つまり聞き手を説得誘導しようとする話し手の意図がそこに現れるわけである。）

聞き手の知識のフィルターを通ることで、文の内容の詳細が、文の可否に影響する（文として意味が取れるか否かに影響する）ことは、以下の例でもわかる。

(8) 馬が逃げることができるように手綱を括り付けておいてください。

これを目的用法と解釈しようとするならば、「手綱を括り付ける」行動が独立して完結しており、その詳細な違いは問題にならない（話し手にとって）ものと考えられる。しかし、だとするとそれは一般的に、「馬は逃げない」ことを帰結する。括り付け方の詳細が問題にならないのであれば、帰結として考えられるのは「馬が逃げない」方でしかないからである。これは「ように」節に述べられた目的と矛盾し、従ってこの文の場合は目的用法ととることは無理がある。

しかし、態様用法であれば、「手綱を括り付ける」行動の詳細が「ように」節で説明されており、一般的な「括り付け方」ではなく、「括り付ける範囲にはなんとか入るけれども実は馬を逃がせるような括り付け方になっている」ような括り付け方をすることになる。そこに話し手の良からぬ(?)意図をも感じることができる。このように、聞き手の知識との相互作用によって文の解釈が制約を受けうるのである。

さてまた(2)において、聞き手の知識において、手綱を括り付けることで馬が逃げないことが実現しうるかどうかが自明ではない場合（例えば手綱や馬に関する知識を欠いている聞き手などの場合）、「手綱を括り付ける」を行動に移す際に注意が必要か（ともかくも括り付けさえすればよいかどうか）は現実的な問題となる。この場合は注意するにこしたことはないとはいえ、それにはコスト（注意する労力）もかかるのであって、現実的行動においてはその違いは問題である。そうなると、話し手に手がかりを求めることも一つの方策であって、話し手の知識にそうした内容が含まれていないか、推測することになる。もし、注意が必要か否かの二分法で考えるならば、必要な場合（態様用法）と不要な場合（目的用法）とが明確に区別されて意識され、これが(2)においては2つの用法として認識されることになるものと思われる。しかしながら、(6)のような場合では、行動（説教）の詳細はより細分化されて認識されるのが当然であるから、注意が必要か否かの二分法で考えられることは少なく、そのため2つの用法が明確には立ち現れ

てこないであろう。「説教」行動はそもそも何を話すかという点で千差万別だからである。もし「説教」と言えば話すことは決まっているような頑固親父に(6)の依頼をする文脈であれば、(6)にも目的用法が明確に意識されよう。次の

- (9a) あなたが合格するように祈ります。
- (9b) あなたが合格するように神に祈ります。
- (9c) あなたが合格するように神に祈りを捧げます。

の微妙な違いも同様に考えられる。なおこうした文脈に慣れてくると

- (9d) あなたが合格するように、あなたのことを神様にお願いしておくわね。
- (9e) あなたが合格するように、あなたのことを理事長にお願いしておくわね。

も、両用法が可能のように感じられる。通常ならば「～ようにお願いする」は、動詞「お願いする」だけでは全く定まらないお願い内容が、「ように」節によって補完されて初めて意味のある言い回しになるのである(態様用法)が、人によってまた場合によっては、「あなたのことを神様(理事長)にお願いしておく」だけで行動の記述が完結しているようにも感じられる(目的用法)。そうすると、その場合には両用法が可能となる。というより、両「用法」が渾然として、区別する理由もないように思われる、ということである。

2.2 「ように」節の扱い

結局のところ、「ように」節の内容が「望まれている」「欲せられている」状況を表しており、それが実現されるべく努力する際にどのような行動をとるかに程度・詳細の違いがあるということである。その意味では態様も短期的な目標・目的であるし、目的も広い意味での態様と言える。即ち、「ように」の目的用法も態様用法もどちらも目的(あるいは態様)用法で、程度や詳細の違いがあるのみとすることができる。

「ように」節の扱い(計算機への指示)

- ①「ように」によって導かれている節の内容を描出し、それが(自分または該当の人にとって)「望ましい」ものであることを認識せよ。行動は、その内容が実現することが短期的または長期的目標となる。
- ②「ように」節に続く動作の詳細について検討せよ。①が動作の詳細に影響するならば、①に従え。

もちろん、上記で「行動せよ」「従え」というのは主語にあたる人がそう行動するということを

表しているので、発話内でのその節の内容がどう扱われているかによって計算機自身の行動は変わる。

発話を「理解」する際には、こうした「望ましき」「欲求」の類は避けて通れないものであって、「望ましい」「よい」「〇〇したい」ということの意味を、それ以上分解して何かに帰着させることはできないものと思われる。「〇〇したい」ことについては、計算機がその後「生活」する中で実現に向けてコストベネフィットを考えながら行動する、そのおおもとの目標になるものである。また、他の主体（その生活空間における他の計算機や人）がどのように行動するかを推測するために、それらの主体の欲求を把握することが（うまく立ち回るためには）必要となる。

その上で、実際に行動に移す（あるいは、行動を想像する）際に、問題の行動がどのような詳細を持つかを検討するならば、その態様が問題になるのであり、それが②の指示となる。これが態様の「ように」である。しかしもしその行動に詳細な態様（「ように」節の内容が関わる詳細の違い）が存在しないのであれば、それは態様の説明としては空虚なものであり、単に①の認識が残るのみである。これが目的の「ように」となる。(6) や (9a-c) など、空虚かどうか判断しかねる場合もあり、その場合は②が活きるか否かの違いとなるが、それは計算機の行動上、大きな問題とはならない。行動において大した違いを生じさせないからである。いずれにしても何らかの説教をすることになるし、その際には当然子供の矯正を念頭に置くのである。つまりは、目的用法とされるものを明確に認識しても益が少ないのである。

おわりに

似たような文

(10) (あなたも) 彼がするようにボールを転がしてください。

については、本稿で扱った文とはやや異なり、目的用法を考えることは無理がある。これはつまりは態様を述べているのであり、比況によって態様を説明しているのである。「ように」節の内容を描出し、それが広い意味では「目標」となるという点では計算機の動作は同様であるが、真の「目標」は描出された内容そのもの（彼がボールを転がす）ではなく、それと似ているが動作主が異なるもの（私がボールを転がす）である。何を变え何を残すかは文と文脈によって変わるであろうが、それを推測するメカニズムは、我々自身の意識できている部分とできていない部分があるものと思われ、その解明は今後の研究に俟たねばならない。

(10) においても、ごく小さな意味の違いは見られる。それは本稿で扱ったように、ともかくもボールを転がせばよいのか、それとも転がし方の詳細に「ように」節が介入するのか、という違いである。この点では本稿の「ように」の扱い方がそのまま生かされる。これらも含め、「ように」や「よう」の包括的な扱い方については今後の研究に俟ちたい。

参考文献

- 井出至1967, 「形式名詞とは何か」『講座日本語の文法3』明治書院, pp.37-52
- 奥津敬一郎1986, 「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp.28-104
- 宝島格・今仁生美2002, 「計算機による言語理解のための方策」, 『名古屋学院大学研究年報』15
- 宝島格・今仁生美2003, 「計算機による言語理解のための方策2」, 『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第39巻第2号
- 宝島格・今仁生美2016, 「発話理解における事態の構造化について」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第27巻第2号
- 寺村秀夫1984, 『日本語のシンタクスと意味2』くろしお出版
- 名古屋学院大学日本語表現部会(編著)2019, 『2019年度日本語表現』名古屋学院大学
- 日野資成2001, 『形式語の研究 文法化の理論と応用』九州大学出版会
- 森田良行2007, 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- 吉川武時(編)2003, 『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房